



第 85 号

(年 4 回発行)

編集発行

前 学 院 大 学  
弘 報 委 員 会

印刷所

(有)小野印刷所

# 2021(令和3)年度 九月期学位記授与式挙行



2021(令和3)年度九月期の学位記授与式が去る九月三十日(木)午後三時三十分より本学礼拝堂において挙行されました。

コロナ対策をしつつ、関係学部の教職員の見守る中、厳粛に式が執り行われました。鎌田学日本語・日本文学科長の司会により、パイプオルガンの演奏に始まり、楊尚真宗教主任の聖書朗読、祈祷の後、薬科勝之学長の

## 弘学の今後の課題 —教育の質保証と学修成果をめぐって—



学長 薬科 勝之

現在、大学に求められている課題は、教育の質保証です。中央教育審議会のいわゆるグ

より卒業証書が授与されました。その後学長より卒業生にお祝いとお励ましの言葉がありました。式終了後には、卒業生一人一人に薬科学長・阿保理事長より、またご出席された教職員の皆様から、お祝いの言葉や励ましの言葉が交わされ、記念写真を撮ったりと、卒業生の新たな旅立ちをお祝いしました。前途に神の祝福がありますよう心からお祈りします。

ランドデザイン(2040年に向けた高等教育のランドデザイン(答申))(平成30年)で、大学の現在の教育の質保証の取組は不十分だと述べ、その例として、その1つの指標として、事前学修・事後学修に費やす時間を取り上げ、その時間が不十分であるとの指摘をしています。国立教育政策研究所の調査によると、大学一、二年生の授業出席時間の平均が1週間あたり約20時間、予習・復習の時間の平均は約5時間にとどまっております。米国等と比較して、受講科目が多い、授業以外の学修時間の確保を難しくしているのではないかと、だから密度のある学修体系を整える必要があるというのです。学士課程全体のカリキュラム構成、学習者の知的習熟過程等を考慮・把握する必要がありと言います。

す。日本の学生の、授業以外の学修時間の短さに関する指摘です。これは単位の実質化といわれる取組で、単位制度の根幹に関わる問題なのですが、実は、我が弘学においても事前学修・事後学修は「学修行動・学修成果アンケート調査」にもその低さが表れており問題です。また答申では(体系的なカリキュラムの設計)の必要性も指摘されています。米国等と比較して、十分対応できるはずですが、ただしこれは授業科目レベルの話です。これならばかなり前から実施していたのです。しかし、今求められているのはこれだけではないのです。中教審の言う学修成果とは何

もう一つの課題は、学修成果の可視化と情報公表の促進です。学修成果の可視化は、大学教育の質保証にとって、最も重要な指標の一つになっています。まず学修成果については、教員は、学生に対して試験を行ったり、課題提出を求めたりして、その結果を成績評価しています。可視化ということならば、まず、数値で換算する方法が、明確に示せるやりかたでしょう。ならば、従来からの成績評価のやり方一要素、秀優良可など一十分対応できるはずですが、ただしこれは授業科目レベルの話です。これならばかなり前から実施していたのです。しかし、今求められているのはこれだけではないのです。中教審の言う学修成果とは何

か? 端的に言えば、DP(ディプロマ・ポリシー)の達成度です。DPとは、大学学部等が、学生に対して、卒業時にどのような能力を身に付けさせるかを、ステーク・ホルダーに対して明瞭かつ具体的に表現した方針を言いますが、これを人材養成機関としての大学が、卒業時にどのような能力を持った人材を育成したか、これをDPの具体的な項目に即して、目に見える形で表示(つまり可視化)するわけです。卒業時に、身に付けたものを、どのような指標で測り、どのような達成度なのかを測定するという課題があります。本学ではそのために「アセスメント・ポリシー」を策定しましたが、その十分な具体的な運用・活用は今後の課題と言えます。

## 中長期目標実施計画の 確立・実践に向けて

学校法人弘前学院  
理事長・学院長 阿保 邦弘



### 十四「教育改革の本丸」 『内部質保証システム』の2

前号では、『学士力答申』(2008年)での3Pの明確化、組織的な教育の展開、成果を共通の尺度に沿って評価して改善・

進化につなげるという改革サイクルの枠組みについて述べた。ここで一度内容を整理しておくために、現在全国の多くの大学で、重点的に取り組んでいる事項について述べておく。

第一には、「内部質保証システムの確立と、その推進体制の強化」である。次に、「学修成果の評価と、それに基づく教育改善の確実な実行」である。

もちろん、その前提となる各種調査データの分析、IR活動

の強化、教学のPDCAサイクルの本格化等は、重要な事項として取り組んでいるはずだ。さて本題に戻るが、前号で述べた『学士力答申』では、「教学経営」という言葉が何度も出てくるが、その内容の展開が不十分だったのである。

その点に着目したのが2012年の中教審答申、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」(以下「質的転換答申」)である。

この答申では、教育改革を推し進める教学マネジメントの在り方が提起された。教育の質の向上を実現するた

めには、

- ①「教育課程の体系化(ナンバリングなど)」
- ②「教員間の連携による組織的な教育の実施」
- ③「教育方法の改善や、シラバスの充実」
- ④「初年次教育の充実や、成績評価厳格化」
- ⑤「学修成果の把握と改善(ルーブリックなど)」
- ⑥「教員の教育力向上(FD)のための総合的な施策」
- ⑦「全体が循環し機能するための、全学的な教育マネジメントの確立」

すなわち、3つのポリシーや教学改革方針の明確な意思決定(D)、その執行のための全学的改革推進組織の確立(D)、学習到達度実態の分析評価(C)、改善組織の機能化(A)という、いわゆるPDCAサイクルの構築が求められた。

その中でも特に強調されたのが、「学長を中心とした改革チームの編成」「アセスメントポリシーに則った学修成果の評価」「学修行動調査やアセスメントテスト(学修到達度調査)」「ルーブリック」「学修ポートフォリオ等の活用」と、それを踏まえての改善である。以上の教育改革の最大の目的

は、教育を教員の個人的な取り組みから、大学が組織的に提供する体系だったものに進化させることだった。

また、そのためには「学長のリーダーシップ」「改革の全学的な合意形成」「実効性のある全学的なガバナンスの確立」が必要不可欠なこともない。『質的転換答申』は、『学士力答申』から一歩進んだ、教学マネジメント(内部質保証システム)の全体構造について、本格的な提起を含んだ答申と言える。本学でも、ようやく一二年ほど前から、他大学に近似した事項に着手し始めた。(つづく)

## 二〇二二年度 一年生の特待生授与者

二〇二二(令和三)年度弘前学院大学特待生(二年生)に、十二月二十九日(金)十二時より賞状の授与が行われました。今年度の授与者は次の方々です。

◆文学部  
一年 三浦 聖也

◆社会学部  
一年 齊藤 帆南

◆看護学部  
一年 成田 有那



研究紹介 50

学生と共に歩む研究生生活



看護学部 看護学科 教授 佐藤 厚子

学生は面白い。常に私を刺激してくれる。

本学科の卒業研究は研究計画書の作成のみでなく、論文作成で完成する。今年度、私は4名の学生を担当した。学生とディスカッションしながら、研究テーマを決め、計画書を練り上げる。今年度の卒業論文のテーマは①日大学における食品材料摂取頻度と抑うつとの関連性 第2報、②体幹移動シートを使った介護者の身体的負担軽減効果

果、③更年期症状がある女性へのストレッチ効果、④フレイルの程度と栄養バランスの関連性であった。思うような結果が出ない場合もあるが、今年度は全体的に面白かった。①食品材料摂取頻度と抑うつとの関連性については、女子学生で抑うつと食品材料摂取頻度は関連がある可能性があった。②要介護5の家族を介護している介護者が体幹移動シート(開発中)を使って体位変換を行ったところ、2か月で介護者の体の痛みが消え、介護負担が軽減した。③更年期症状がある女性に、厚生労働省ホームページを参考に作成した独自のストレッチを一緒に

対話室 オリンピック boycot 論 に対する私の暴論

社会福祉学部 社会福祉学科 教授 棟方 達也



東京オリンピックの余韻に浸っているうちに早くも、次の冬季オリンピック北京大会(2022)が迫ってきた。日本国内ではあまりうるさく聞かされていないが(中国を付度するマスコミが多いのかどうかは知らないが)、海外では、中国の人権問題や香港、台湾問題を理由に、平和主義を掲げるオリンピックの北京での開催を疑問視し、ボイコットの本音がエス

行ったところ、症状が軽減した。④フレイル、プレフレイルの高齢者に食品材料摂取頻度の調査を行ったところ、フレイル高齢者は食品材料摂取頻度が少なく、フレイルに標準モデル栄養バランス表(佐藤他、特許第4900042号)を使って食事指導をしたところ、栄養バランスが改善した。いずれの研究も私が長年行ってきた研究の一部を応用したものである。研究自体はデザイン的に多くの問題があるが、いずれも新しい側面からアプローチで懸命に取り組み学生には頭が下がった。

特に心に残った研究は②の体幹移動シート(開発中)を用いた介護負担軽減である。体幹移動シートは長方形のシートでシートに接する面は摩擦が少なく、利用者の体に接する面は摩擦が多い構造になっている。つら、介護者は体位変換や床上移動がしやすいのである。四辺には持ち手がついているので扱いやすい。事例研究ではあるが、使用前は「施設に入所させたい」と思っていた介護者が「痛みがなくなったため、自宅で最後まで介護しようという気持ちになった」とのことであった。学生も私も驚き、その変化に喜んで「人の役に立てたのだ」という思いでいっぱいになった。

学生は茨の道歩き、小さな研究ではあるが協力してくださる方へ感謝の気持ちを忘れず、精進した。このような誠実さは本学のキリスト教精神が根底にあるからではないかと最近思うことが多い。「祈り」がいつの間にか学生の「力」になっている。これからも学生に力をもらいながら共に歩んでいけたら有難い。

判断するのがIOCの権限である。そのIOCが開催を認めたのだから、加盟する各NOCはたとえその決定に不服であったとしても、参加する義務があった。従って、不参加という行為は、オリンピック憲章に謳われた義務違反に相当する。一方、例えばイギリスは、加盟NOCとして参加にふみ切るもの、精一杯の意思表示として開会式を欠席した。一般的な組織、団体であれば、その決定に従わないものは除名される。従って、不参加を決定したNOCは、本来ならば同時にIOCを脱会すべきなのである。しかし、除名ができなかったIOCを弱腰と単純に決めつけることはできない。IOCとは、2021年現在、206のcountryが加盟し、一種の国際秩序的存在

書籍紹介 『入江英弥著「オトタチバナヒメ伝承」』

文学部 日本語・日本文学専攻 薬科 勝之

オトタチバナヒメをめぐる言い伝えは現在様々な形で残る。そもそもオトタチバナヒメとは、ヤマトタケルの妻といわれるが、『古事記』倭健命の東征譚に登場し、倭健命が「走水海」で海難に遭おうとする際、入水してそれを救ったという女性である。この話は研究者のみならず様々な人の興味・関心を呼び、近年では、現代のスーパー歌舞伎の演目「ヤマトタケル」にも脚色され、その中でも取り上げられたほどである。

看護学部FD講演会を終えて

看護学部 看護学科 准教授 田中 真実

看護学部FD講演会を9月3日(金)13時から15時、場所はラーニングコモンズにおいて開催しました。今回は新型コロナウイルスの世界的融合であり、その象徴がオリンピック競技大会なのだから、IOCには、これを可能な限り健全(?)に維持し続けるという責務がある。しかもさらに、その次のロサンゼルス大会(1984)でいわゆる「ボイコット返し」を含む組織崩壊(「オリンピック消滅」の危機を際どく乗り切った事実)、むしろ「IOCの奇跡」と呼んでいいのかもしれない。

近年、何かとIOCの汚点、欠点を取り沙汰され、私自身、問題視していることは多々あるが、ここでは少し擁護する屁理屈を並べてみた。アスリートは、オリンピックが存続する限り、それを目指す

る。著者は言う。成果の一つとしてあげられるのは、場所に着目した伝承研究である。それが「走水海」を中心としたこうした現地調査であった。この中でも興味を引くのは、遺品・遺物の漂着に纏わる伝承である。オトタチバナヒメの櫛のほか、彼女の袖や衣とする例も多かった。またヒメの遺骸が漂着したという伝承も四十例のうち十一例もあったという。遺骸の漂着、水難者を供養し、海上の安全航行を祈願するなど、海辺の信仰生活や祭り結びついている伝承の掘り起こしをとおして、オトタチバナヒメ伝説の撰取・受容と変容におけるイメージ、15時の時点でどんなことを考えている自分でいたいかを自己紹介を兼ねて発表するなど、講演会開始から参加者の心を惹きつける工夫の内容で

ティブラーニングの教育方法の開発」と多岐にわたる研究を行っている中、中でもアクティブラーニングでは、様々な教育技法を用いて、授業を企画実践・評価し、アクティブラーニングを進めています。アクティブラーニングという表現は2012年に文部科学省中央教育審議会において、初めて用いられたが、大学教育では1990年代から、能動的学習の重要性が言われ、柳原先生もそのころから、チュートリアル教育をやり始め、2010年には、PBL(課題解決型学習)やOSCE(客観的臨床能力試験)を体験し、その後の勤務先ではアクティブラーニングは当たり前と呼ばれはじめたと述べていました。今回の講演会は全員参加型で、2時間後の「15時の私」を

まざまな様相が、現時点で考えられる限りのアプローチのしかたで描き出されている。今後、伝説研究のアプローチのあり方とともに、オトタチバナヒメの研究を志す学生には、必読の文献となるであろう。入江氏は本学教授で専門は伝承文学と民俗学。本書は二〇二〇年(令和二年)六月に岩田書院より発行された。総頁数三九六頁。定価、八四〇円十税。



### 教師の魅力を実感

文学部 日本語・日本文学科4年 鶴ヶ崎正一郎



8月30日から9月17日までの3週間、三沢市立堀口中学校で教育実習をさせていただきました。新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、三沢市内の中学校が部活動禁止期間中だったため部活動の見学はできませんでしたが、しかし、この状況下からこそ学べるものもあると前向きな気持ちで教育実習に臨みました。

初めの1週間は、主に授業参観でした。担当する2学年の他、1学年と3学年の国語の授業を参観しました。大枠は同じなのですが、各クラスの生徒の実態に応じて授業展開や発問の仕方が

が若干違い、その都度、授業していた先生に質問しました。先生方は日頃から生徒をよく観察されていて、あの生徒は文章表現が苦手だから机間指導で助言が必要、このクラスは発表に対して消極的だから指名した方がいい、この生徒はよく寝るから起すタイミングは、など授業をする上で生徒の実態を把握することはとても大事だとおっしゃっていました。私も、授業だけでなく、休み時間や朝の時間を活用して、生徒とたくさんコミュニケーションを取りました。生徒と過ごす時間はとても楽しく、これも教師の魅力のひとつなのだな、と実感しました。

緊張と不安でいっぱいでしたが、生徒から向けられる真つすぐな視線が温かく、自信を持って授業を行えました。授業終了後は必ず担当教員と反省会をしました。そこで担当教員から指導をいただき、授業の良かった点や自分の課題を発見することができました。

私は、8月18日から9月17日までの約1か月間、弘前脳卒中リハビリテーションセンターで実習をさせていただきました。脳卒中センターは急性期病棟と回復期リハビリテーション病棟からなる、病院内完結型の医療を展開しており、理学療法士や作業療法士による訪問リハビリテーションも行っています。

あわせた社会福祉サービスの利用を検討しました。患者様からの情報収集の際は時折、病院への不満や不安を本人は口にしていて、それは早く退院したいという焦燥感と長期入院に伴う経済的負担からくるものと分析し、それらを解決するための支援計画を立案しました。また、患者様からは「熱心な人だね。あなたと話していると退屈しない。」といった言葉をいただき、笑顔も見られたため、短い期間ながら良い関係性を築けたと感じます。

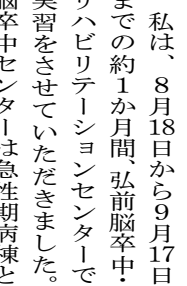
私は、精神科病院と地域生活支援センターの2か所で精神保健福祉実習をさせていただきました。まず、精神科病院での実習では、個別化の重要性を改めて学ぶことができました。福祉の勉強を4年間していく中で、障害名や各障害の特徴、かかり方など多くのことを知識として得ることができました。ここから、各障害をひとくくりにして考えていた自分がいました。しかし、精神科病院での実習で、例えば同じ「認知症患者」だとしても生活歴や性格、環境等人それぞれの特徴が出てくるため、ひとくくりにかかり方が正しいというものはなく、それぞれに合ったかかり方を模索し、提供する必要があると学びました。

地域生活支援センターでの実習では、動く福祉の体現の重要性を学ぶことができました。実習の中でつがる市のデイケアに行く機会があり、そこで、実施回数や参加者が少なく、規模としては小さくても、利用者の方々の自宅の近くにあり、様々な手となっている。話したいことを話す地域住民は、だんだんと笑顔になり満足した表情を表出させていた。

私は、県内で地域に根ざした病院に就職する予定である。実習で、地域住民の悩みや地域の課題を知れたことはとても有意義なものとなった。領域実習では、患者が悩みや苦悩を表出させる場面が少なく感じた。統合実習を通じて患者に短い時間でも真摯に向き合い、コミュニケーションをとることで本人の悩みにたどり着け、その

### 社会福祉実習を終えて

社会福祉学部 社会福祉学科3年 下山 颯太



私は、8月18日から9月17日までの約1か月間、弘前脳卒中リハビリテーションセンターで実習をさせていただきました。脳卒中センターは急性期病棟と回復期リハビリテーション病棟からなる、病院内完結型の医療を展開しており、理学療法士や作業療法士による訪問リハビリテーションも行っています。

病院内には、私が担当した患者様のように不安や怒りなどの心理的課題を抱えた方が一定数います。その課題の背景にはなにがあるのかを読み取り、主訴を明確にすることで、解決につながる目標を設定し、本人の状況に

今回の実習で当初は、能動的に行動する場面が多く、病院のスピード感についていけないことが度々ありましたが、徐々に自発的に行動できるようになり、自身の成長を実感しました。今回の実習の経験を活かし、医療福祉分野への就職を目指したいと思っています。

コロナ禍での実習という事で実習数日前に実習先が変わるというトラブルがありました。様々な方に支えられ実習を終えることができました。実習では、自己覚知の重要性、精神保健福祉士の役割や精神障害を抱えているらしやる方々のかかり方などたくさん学ぶことができました。この実習での学びや4年間で学んだことを生かし、地域や人に寄り添ったかかり方ができるよう精進していきたいと思っています。

なことが体験できることはとても意味のあることだと感じました。地方になればなるほど人口が減り、高齢化が進み、福祉サービスが弱体化していくと思います。地方を活性化することはもちろん大切であると思いますが、過疎化が進んでいる現状、栄えている地域でも福祉につながることを提供することが望まれていて強く感じました。また、栄えている地域でも福祉につながることも改めて学ぶことができました。

### 生徒が興味を持てる授業をつくるために

文学部 日本語・日本文学科3年 池田 奈穂



教師を目指す際、避けて通ることができない一番の難関が授業づくりである。当たり前と言えば当たり前だが、正直、授業を行うこと自体は誰でも可能

だ。問題は、生徒が興味を持てる授業を行うことができるかどうかである。「つまらない」「退屈だ」と思われた瞬間に生徒はその科目や勉強自体に興味を失ってしまう。勉強が本分と言われる学生ならば、それはより深刻な問題になるだろう。たとえ授業が退屈でも、生徒はそこから逃げることはできないからだ。だから、教師は生徒に退屈を感じさせないため、生徒が興味を持てる授業を行う必要がある。

長谷川先生の授業では、レベルが高そうな課題を多くの生徒がすらすらと解いていた。堀野端先生は、前回の授業で興味深い感想を書いていた生徒の意見に触れ、「ね、○○と声をかけており、その様子に「これ生徒は嬉しいだろうなあ」と思わず口元が緩んでしまった。どちらも生徒のことをよく知っているからあえて課題を難しくしたり、声かけをしていて「生徒のことを知る」ということは授業

でこう活用できるのか、と衝撃を受けた。また、設定された課題に、授業で扱う教材を生徒自身の体験と結び付け、自分ごとで考えさせる工夫がなされていたり、反応の仕方など生徒が授業に興味を持つ工夫が随所でされていた。

統合実習とは、複数の対象の看護に必要な知識と技術を統合的に体験し、より実践的な看護実践力を身につけ、看護専門職として必要な職業観と倫理観を培うことである。

私は、地域で暮らしながら生活していく人々の支援を行っている地域包括支援センターで、統合実習を行った。地域包括支援センターでは、地域住民の身体的な障害を持つ悩み相談や、

また、介護保険がまだ適用にならない方の家庭訪問を行った。家庭訪問では一時間程、本人の抱えている悩みを含め、最近の生活について聞き、話し相

人のQOLの向上に繋がれると考えた。これを実現させるには、自分の仕事に余裕を持ち、患者の前では慌たたくしなくようにする必要がある。そうすることで、患者が退院後に悩みをかかえたまま社会に復帰することは少なくないと考えた。地域でどのように暮らしていくかを患者と相談し、必要な社会資源の活用を提案できるようにしていきたいと考える。

生徒が興味を持つ授業をつくる方法は色々存在するが、そ

れらが一貫しているのは、生徒でない私たちが受けても興味を惹かれ、あつという間に時間が過ぎてしまうということだ。聖愛中学・高校の授業研究で実施された授業はまさにそれだった。

授業後は多くの質問の機会が設けられ、授業づくりで気を付けていることやすぐに実践できそうな技も知ることができ、それだけでも大きな収穫だった。これらの経験を早く自分のものにして、受けている生徒が羨ましいと思えるような授業をつくりたいと思う。

統合実習とは、複数の対象の看護に必要な知識と技術を統合的に体験し、より実践的な看護実践力を身につけ、看護専門職として必要な職業観と倫理観を培うことである。

私は、地域で暮らしながら生活していく人々の支援を行っている地域包括支援センターで、統合実習を行った。地域包括支援センターでは、地域住民の身体的な障害を持つ悩み相談や、

また、介護保険がまだ適用にならない方の家庭訪問を行った。家庭訪問では一時間程、本人の抱えている悩みを含め、最近の生活について聞き、話し相

なことが体験できることはとても意味のあることだと感じました。地方になればなるほど人口が減り、高齢化が進み、福祉サービスが弱体化していくと思います。地方を活性化することはもちろん大切であると思いますが、過疎化が進んでいる現状、栄えている地域でも福祉につながることを提供することが望まれていて強く感じました。また、栄えている地域でも福祉につながることも改めて学ぶことができました。



# 三沢の歴史と文化を巡る旅

文学部 日本語・日本文学科3年 佐々木 恭輔



十月九日に、「文学散歩」で三沢市に行きました。「文学散歩」というのは国語国文学会が主導のイベントで、ある地域の歴史や文化、その地域ゆかりの作家について学ぶ為様々な地域を訪れます。一年生の頃よりこのイベントに参加したいと思っていました。なかなか日程が合わずにはいきました。念願叶い、今回の「文学散歩」に参加することが出来て非常に嬉しく、前日からソワソワしていました。

今回の「文学散歩」は三沢市の歴史や文化、そして三沢市出身の歌人であり劇作家でもある寺山修司について学ぶことが目的です。



最初に訪れたのは「三沢市先三沢航空科学館」です。ここは三沢市とは切っても切り離せない「航空」の分野と科学についての展示をしています。太平洋無着陸横断という偉業に関する資料は非常に興味深かったです。その他にもホンダジェット機の展示や豊富な種類の体験型展示、外の広場には米軍や航空自衛隊で実際に使われていた機体の展示等がありました。非常に楽し

# 地域総合文化研究所講演会 「弘前の前衛舞踏」記録

地域総合文化研究所主事 入江 英弥

地域総合文化研究所では、本年度の講演会を十一月十四日(日)に本学一階第一階ラウンジ・コモンスペースを会場として開催した。内容は次の通り。

「弘前の前衛舞踏」  
民族誌映像「踊りが生まれるとき」上映と講演  
イリナ・グリコレ氏

舞踏「海の聖母」雪雄子氏  
座談会 石田和男本学教授  
(司会)、イリナ・グリコレ氏、雪雄子氏  
講演者のイリナ・グリコレ氏はルーマニア生まれで、映像人類学を専門とされている。現在、弘前大学非常勤講師。「映像インスタレーション」による東北関東

の伝統芸能と前衛舞踏の文化人類学的研究により、第十三回スミセイ女性研究者奨励賞(住友生命)を受賞。今回は、舞踏家の雪さんが自然豊かな岩木山麓で生活を続ける中、四季の移ろいに応じて、いかに舞踏を生み出しているかを、自ら制作された映像を用いながら講演いただいた。



雪雄子さんは東京生まれ。「舞踏」の創始者、土方巽氏から直接教えを受けた方で、「北方舞踏派」の創設メンバーの一人。北国の生命力を表現する舞踏家として高い評価を受けている。現在、津軽を拠点に活躍し、近年では、パリやモスクワなど海外公演を積極的に行っている。また、弘前大学や慶応義塾大学などでワークショップを開催している。今回は、イリナさんの講演と映像を受けて、津軽の自然との出会いから生まれた舞踏を披露していただいた。

# 「こころをオープンに、寄り添う糖尿病看護を大切に」

看護学部 土屋陽子教授  
2021年度日本糖尿病教育・看護学会功労賞を受賞



この度、本看護学部土屋教授が、2021年度日本糖尿病教育・看護学会功労賞を受賞されました。この学会は、糖尿病患者の患者教育を質、量ともに向上させることを目的に1996年に設立されました。土屋教授は、本学会設立当初からこれまで糖尿病看護

の実践・教育・研究に長年従事されてきました。また、2020年9月にはコロナ禍において、初のWEB開催となる第25回日本糖尿病教育・看護学会学術集会長を務められ、3400人が参加しました。本学会の発展に大きく貢献されたことから今回の受賞になりました。

土屋先生は、慢性の病とともに生きる人の看護に、臨床・教育の場、40年以上ご尽力されてきました。その中でも特に、糖尿病患者・ご家族と向き合う時間の大切さを私たちに伝えてこられました。昨年の学術集会長講演の中で、1型糖尿病患者さんの人生の混乱の時期にも話を聴き続けたこと、糖尿病を絶対直して見せると豪語される患者さんへの否定しない看護、寄り添う看護についてお話しくださいました。

慢性の病は、治癒しないため生涯治療が必要です。これまでの

今回の「文学散歩」では三沢市ゆかりの作家について学ぶだけでなく、三沢市の歴史や大切な文化である「航空」を知る良い機会でした。来年は四年生で「文学散歩」に参加することは出来ませんが、今度はプライベートで訪れたいと思います。

土屋先生の受賞は、本学にとって誇りであり喜びです。そして探求できる場に「一緒にさせていたたく私自身も、感謝の気持ちでいっぱいです。土屋先生、受賞おめでとうございます。

看護学部准教授 井澤美樹子

# 『自閉症は津軽弁を話さない』について考える、を終えて

文学部 日本語・日本文学科 教授 鎌田 学

国語国文学会、英語英米文学会として大学院文学研究科共催による『自閉症は津軽弁を話さない』について考えるが、2021年7月10日(土)に本学1号館4階大講義室で開催された。これは文学部創設50周年記念事業「その1」として企画されたものである。

「共同注意、意図理解、自己化」に問題を抱えているためであると指摘された。また講演の最後では、アイスランドでは若いASDが、アイスランド語より好んで英語を話す傾向があるという見方を紹介。かの地におけるメディア環境が子どもに影響を与えている点に言及された。

井上諭一文学部長による冒頭の挨拶の後、元弘前大学教育学部教授、教育心理支援教室・研究所がデジタルつがる代表松本敏治氏が、「自閉症は津軽弁を話さない」というタイトルで基調講演を行った。「定型発達」の者と「自閉症スペクトラム障害者(ASD)」との言語習得上の差異を様々なデータと事例に基づき考察。後者にとって方言(周囲の言葉)学習が困難な理由は、

「共同注意、意図理解、自己化」に問題を抱えているためであると指摘された。また講演の最後では、アイスランドでは若いASDが、アイスランド語より好んで英語を話す傾向があるという見方を紹介。かの地におけるメディア環境が子どもに影響を与えている点に言及された。



多くのの方々のご助力を賜った。感謝の意を表する次第である。

